

2022年1月9日（日）上演⑬

東京都 立川女子高等学校

「明日きれいさっぱり忘れて

くれるって言うから君が」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

鬼頭 すみれ（東京都立小石川中等教育学校5年）

私たちの心をひたすらに抉りながらも、リアリティのある女子のあるあるや会話が存分に積み込まれた、狂気と美しさに塗れた作品であり、60分間目が離せなかった。男子と女子では受け止め方が大きく異なる、魅力的な作品であった。

本作は主に3つのパートが同時並行で進んでいく。「お願いします」という掛け声で流れるポップな音楽とともに女子あるある（授業中に指毛を抜く等）を展開していく迫力のあるパート。3人の女子が自分の心の陰を独白するパート。そして仲良し5人組のお泊まり会のパートで、ここではやがてある1人の女子が彼氏に裸の写真を送っていることが判明する。

女子高生の象徴でもある制服を非常に上手く使っていた。最初に皆で正面を向いて踊るシーンで制服の着こなしが揃っているところに女子の暗黙の了解を感じた、という声や、独白のシーンでは直前に3人とも靴下を上げブレザーのボタンを閉め身だしなみを整えているところが可愛くありたい女子を形容しているのでは、という声が出た。特にラストの大勢の女子が輪になり、回りながら制服を脱ぎ投げていく表現は圧巻であった。

「裸の写真を送ることよりも、送る彼氏がない方が恥ずかしい」という発想の転換は今まで私たちが気づかなかったもので、講評委員からは怖いという声が多く出たが、それと同時に女子の儂さを感じたという意見も見られた。お泊まり会に遅れてやってきた子の彼氏との電話のやり取りを馬鹿にして、彼氏に裸の写真を送っていることが判明した時はリベンジポルノを本気で心配して、分裂して、大人ではない「女子」だからこその感情や行動に美しさが見られた。

女子の距離感や会話のシーンも大変リアルであった。スマホを見ながらの急に止まる会話、足パカや寝たフリなど、女子なら誰しもが経験したことのあるようなものが出てくることにより、怖さに置いてかれることなく、自分と劇を常に繋いでいてくれるような気がしたという意見もあった。

ラストシーンでは3つのパートが交わり、「お願いします」という掛け声を皮切りに、一人一人が自分の闇や忘れてほしいことを告白していく。観客の心に毒を添えながら、女子のアイデンティティを魅力的に取り出した作品であった。

立川女子高校演劇部の皆さん、ステキな舞台をありがとうございました。

